＜研究ノート＞

『創価教育学体系』における価値に関する一階理論の検討：準備的考察

蝶名林　　亮

私はこれまで倫理学の客観性や倫理・道徳と科学的知見の関係といったメタ倫理的な問いを主な研究対象としてきたが、そのような問題関心から、牧口常三郎に関する研究も行ってきた。牧口の研究を行ってきた主な理由は、私が関心を持っているメタ倫理学上の立場の一つである「方法論的自然主義（methodological naturalism）」を牧口が採用して価値に関する議論を行っていたと考えられるからである[1]。

牧口に関するこれまでの研究成果をまとめると以下のようになる。

①牧口は価値・倫理についての哲学的な問題は、社会科学で用いられている経験的な方法によって探究されるべきだと考えていた。このような考えは現在ではしばしば「方法論的自然主義」（Railton 1989 を参照）と呼ばれている。この考えについては支持者もいれば反対者もいる。

②『創価教育学体系』の第２巻にあたる『価値論』（『牧口常三郎全集』第５巻に収録）の時点では、冒頭で方法論的自然主義が標榜されているが、この考えとは衝突するように見える文言もあり、不徹底な部分があった（蝶名林 2015）。

③『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（『牧口常三郎全集』第８巻に収録）では方法論的自然主義がある程度徹底されたものになっている（蝶名林 2016）。

このような研究成果を踏まえて、牧口の思想について私は現在次のような問題関心を持っている。

Ryo Chonabayashi（創価大学文学部講師）

[1] 牧口の初期の著作である『人生地理学』（『牧口常三郎全集』第１巻、第２巻に収録）は 1903 年の発刊だが、20 世紀のメタ倫理学史における出発点となった G. E. ムーア（1873 - 1958）の『倫理学原論』（*Prinpicia Ethica*）も同じ 1903 年の発刊である。20 世紀のメタ倫理学勃興と同じ時代を牧口は生き、著述活動を行ったということになる。

①牧口の思想と J. デューイの思想の理論的比較検討

J. デューイ（1859 - 1952）も牧口と同時代に同じような自然主義的な構想を持って哲学・教育学を考えていた観がある。地理的な違いはあるが、同じ時代に教育と哲学という共通の分野において仕事をしたこの二人の思想の理論的な比較は、現代の自然主義研究に取り組む研究者にとっても興味深いものとなる可能性がある。

②価値に関する牧口の一階の主張の整理

これまでの牧口に関する私の研究は、牧口が価値に関する探究をどのようなものだと考えていたのかというメタ倫理的な関心に基づいて行われてきたものであったが、牧口がどのようなものが実際に価値を持つと考えていたのかということについては整理してこなかった。この点についても整理する必要がある。

③牧口の宗教哲学の整理

『創価教育学体系』などに見られる牧口の信仰観は、一見したところ、「パスカルの賭け」に代表される一種のパスカル的な実践的理性に訴えたものになっているように見える。そのような信仰観は信仰主義（fideism）からの挑戦に応えなければならない。即ち、キルケゴールの『おそれとおののき』で展開された『旧約聖書』創世期におけるアブラハムとイサクの物語に代表されるような、見返りを求めない純粋な信仰なるものの重要性をあるタイプの信仰主義者は主張する。このような考えを持つ信仰主義者は、パスカル的な実践理性に訴える信仰観を信仰者が真に求めるべきものとは認めない。牧口が提示した信仰観をパスカル的な実践理性に訴えるものとして理解することの妥当性、そしてその信仰観はこのような信仰主義の挑戦に対してどのように対応することができるのか、検討の余地がある。

④牧口の初期の思想と中期・後期以降の思想に関する理論的検討・比較

牧口は『創価教育学体系』第２巻「価値論」の冒頭で、彼の初期の主要な著作である『人生地理学』は価値に関する著作であったと述べている。では、『人生地理学』において牧口が提示した価値に関する考えとはどのようなものであったのだろうか。それは、たとえば後期の『価値論』とはどのような関係になるのか。これらの問題に関する理論的な研究が必要であろう。このような理論的研究の成果は、牧口が『人生地理学』から『創価教育学体系』へと至る道の中でどのような思想的な展開を見せたのかという歴史的・思想史的研究を行うためにも有益な知見となるだろう。

以下、②の課題に取り組むための若干の準備的考察を行う。

２．幸福に関する主張の整理

上述した②「価値に関する牧口の一階の主張の整理」という研究課題について、簡単な説明をしよう。

価値に関する哲学的な探求は、大きく二種に区別することができる。

一つ目は、「どのようなものが価値を持つのか」「価値にはどのような種類があるのか」「それらの異なる価値の関係はどのようなものか」などの、価値に関する直接的な問いである。これらの問いはしばしば価値に関する「一階の問い･探究（first-order questions, inquiry）」と呼ばれる。ここでいう「直接的」とは次の意味においてである。即ち、「価値なるものはそもそも存在するのか」「われわれの価値判断とはつまるところどのようなものなのか。われわれの何らかの感情の表現のようなものなのか、それとも、価値に関する事実なるものに関する真偽が問える信念のようなものなのか」などの、価値そのもの、価値判断そのものの本性に関する問いに答えることなく探求される価値に関する問題という意味である。後者は「二階（高次）の問い･探究（second-order or higher order questions, inquiry）」と呼ばれる。

これまで筆者が行ってきた牧口に関する研究は、牧口の価値に関する二階の主張に関するものであった。一方で、②の研究課題は、価値に関する一階の問いについて牧口がどのような見解を持っていたのか検討するというものである。

牧口の価値に関する一階の主張について考えるに際して、牧口が幸福についてどのような見解を持っていたのか、検討してみることが有益であるように思われる。「人は○○によって幸せになることができる」という主張は、幸福に関する典型的な一階の主張である。この点に関して、牧口が幸福について多く発言している著作として『創価教育学体系』を挙げることができるが、私の見るところ、牧口はこの著作で幸福に関して二つの異なる主張をしている。

２－１　快楽主義？

幸福とは何かという一階の問いに対する伝統的な回答の一つに快楽主義が挙げられる。快楽主義は以下の二つの考えから成り立っていると考えることができる。

快楽主義：①ある人の人生が良くなるのは、その人の人生に快が増えた場合、かつ、その場合のみである。②ある人の人生を良くするものは、快楽のみが持つ心地よさ（pleasantness）と呼べる状態である。

『創価教育学体系』における牧口の主張を見てみると、快楽主義的な主張であると解されるような文言がいくつか見つかる。

> 吾々の社会に共通する幸福といふ語によつて、捕捉されるその概念の内容を分析するとき、吾々は主観的要素と客観的要素とを区別し、同一の環境即ち客観的外界の条件であつても、之に対応する人の異るによりて、又た同一の人であつても時を異にすることによつて気分に変化を来し、快とも苦とも感じ、従つて同一の外的条件でも幸とも観じ、不幸とも歎ずる（p. 128、以下、ページ数は全て『牧口常三郎全集』第５巻から）

これは、状況によって何に幸福を感じるのか異ると主張している箇所だが、この箇所で牧口が人の幸・不幸を分けるものとして言及しているのは「快」や「苦」であるように見える[2]。

また、牧口は幸福を得る事例を列挙しつつ、次のようにも書いている。

> 宗教家の生活、真に社会改造を唯一無二の念願とする志士の生活、教育に没頭する真正の教育家の生活等は財産はないが、無限の欣悦に浸り、無限の英気に培はれ、依つて安心立命し、虚心純潔にして小児の如き天真無限の幸福を感ずる（p. 133）

ここで牧口は幸福を「感じる」ものであるとしているから、牧口は一種の快楽を幸福の尺度としていたと推測することができる。

より直接的な表現として、「快楽を増し幸福を増進する」（p. 220）と述べている箇所もある。この表現を素直に読むと、牧口は快楽が増すことで幸福が増進されると言っている様子であるから、ここでも表現されている考えは快楽主義ということになるだろう。

ただ、牧口がここでどのような快楽主義を想定しているのか、さらなる検討の余地もあるだろう。ここで牧口が想定している快楽主義はベンタム流の古典的な快楽主義であろうか。それとも、何らかの仕方で快楽の種類の中での質の違いを認めようとする J. S. ミルが主張したようなものであるのか。ベンタムやミルなどの古典的な快楽主義者とも比較することで、牧口が快楽についてどのように考えていたのか、さらに明確にすることができると思われる。

２－２　非快楽主義？

一方で、牧口は快楽を得ることそのものが幸福につながるのではなく、価値を十分に獲得し

---

[2] ただ、そのすぐ後の箇所で牧口は「幸とも観じ、不幸とも歎ずる」とも述べており、幸せだと「観じる」ことと「快」を感じることを区別しているようにも見える。そうであった場合、牧口がここで言っている「幸」と観ずることは、「自分は幸福である」という一種の判断であるように思える。快を感じることは判断ではないようにも思える。

実は快（pleasure）とは何かという問いは難問である。快とは一種の命題的態度（propositional attitude）であるという論者もいる（Feldman 2004）。この見解に従うならば、たとえ牧口が幸福を「感じる」ことと「観ずる」ことを区別し、幸福の源泉は後者であると見なしていたとしても、快楽主義の一つの形態を想定していたと考えることができる。このことを踏まえると、牧口が幸福の尺度として快苦を重視していた箇所は、とりあえずは快楽主義的に解釈しても大きな問題はないであろう。

た状態が幸福であるという主張もしている。「価値を十分に獲得する状態」として予想できることとして、たとえば、知識を得る、自律的な生活を送る、などが考えられるが、たとえこれらに快楽が必然的に伴うとしても、これら自体が幸福の源泉であるのであれば、上で挙げた快楽主義の②の主張とは衝突するから、非快楽主義ということになる。

非快楽主義的な主張として読める牧口の主張をいくつかみてみよう。

> 幸福とは生活状態の形容である。而かも人間の理想的な生活状態を表はしたもので、万人の希望する所である…幸福なる生活とは畢竟価値を遺憾なく獲得し実現した生活の謂ひである（p. 215）

> 人生は畢竟価値の追求である。その価値の獲得実現の理想的生活は幸福である（p. 390）

これらの引用で牧口は価値を獲得することである人の人生は幸福なものになると主張している。牧口の言う価値が、最終的に快楽に還元できるものであるならば、これらの文言は快楽主義的な主張を表しているということになるが、牧口が価値に関する快楽主義を採用していたとは思えない。それは、牧口が価値を「生命の伸縮」という観点から理解している箇所があるからである（宮田『牧口常三郎はカントを超えたか』p. 50, p. 88 を参照）。

> 人間の生命の伸縮に関係のない性質のものには価値は生じない。故に価値を人間の生命と対象の関係性といふ（p. 293）

なぜ牧口は「生命の伸縮」に関係のある事柄が価値にあたると考えていたのだろうか。牧口の答えは、生命の伸縮に関わることに関して人間は評価をする傾向性を持つから、というものである。

> 評価するには人間の外部的感覚機関たる五官だけの作用では十分としない。五官に訴へると共に、心持とか気分とか感情といふ感覚機関の奥に潜んで居る生命の自衛力に訴へてそれの発動を待つのである（p. 260）

> 唯だ主観が対象に影響せられる関係の中で、特に主観の生命の伸縮の原因となる関係に対しては人々は利害といひ、善悪というて価値概念の中に包括する（p. 292）

> 道徳的といひ、美的といひ将た経済的といひ、その対象の質的方面に於て、共通の要素を含むと見做さるべきである。而してこの共通要素と見做すべきものを約言すれば人の注目を吸引するだけの価値あるもの、即ち平凡単調なものではなくて、多様にして、統

一的なるもの、即ち生命の伸縮に関係を有し、これがなくば衆人の価値意識を喚起するに足らざるものである（p. 327）

人間共通の生存慾たる本能を絶対価値として、他の相対的価値を判断する基本となるもので、一切の価値は、即ち人類乃至生物に共通なる生存本能に基づいて派生したものである。即ち人間は個性を有すると共に万人共通の性質を有するといふを前提とするからである（p. 338）

これらの主張をまとめると以下のようになる。

①個人にとって価値あることとは、その個人の「生命の伸縮」のための役立つことである。
②生命の伸縮に関係がある事柄に対して、価値判断を通じて人は引き寄せられる傾向性を持つ。
②価値の獲得が幸福であるならば、その個人の生命の伸縮がなるべく適切に行われている場合、その個人は幸福であると見なすことができる。

以上で示した牧口の主張の内実を明らかにするためには「生命の伸縮」という言葉で牧口が何を意味しているのか知る必要がある。「生命の伸縮」の素直な理解としては寿命の長短を挙げることができるが、牧口はある人の生命が「伸びている」状態を、その人の寿命が長くなっている状態だと本当に考えているのだろうか。それとも、ここで言うところの「生命の伸縮」とは人間種としての特徴に基づいて良く生きているのか、それとも悪く生きているのか、判断できるものなのだろうか。これらの点については詳細な検討が必要であると思われるが、どちらの場合であってもここで牧口が言う「生命の伸縮」は、快楽主義とは相いれないように思える。それは、牧口が上述の引用箇所で主張していることは、価値は生命の伸縮によって決まるものであり、快楽の有無によって決まるわけではないということであるからである。

３．小括

以上、牧口の価値に関する一階の主張について簡単に見てみた。上述したことが的外れでないとすると、牧口の価値に関する一階の主張の中には、その内実を明らかにするためにさらなる検討を必要とするものや、お互いが衝突するように見えるものもあるため、ある程度の整理が必要であると思われる。

参考文献

牧口常三郎の著作

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 1 巻　第三文明社　1983 年

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 2 巻　第三文明社　1997 年

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 5 巻　第三文明社　1982 年

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 8 巻　第三文明社　1984 年

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 10 巻　第三文明社　1987 年

その他の日本語文献

蝶名林亮「牧口常三郎の自然主義的価値理論について」『東洋哲学研究所紀要』第 31 号 25-48 頁　2015 年

蝶名林亮「牧口常三郎の自然主義的な行為の規範節について」『東洋哲学研究所紀要』第 32 号 3-24 頁　2016 年

宮田幸一『牧口常三郎はカントを超えたか』第三文明社　1997 年

その他の文献

Feldman, F. (2004), *Pleasure and the Good Life*, Oxford: Oxford University Press.

Moore, G. E. (1903), *Principia Ethica*, Cambridge: Cambridge University Press

Railton, P. (1989), Naturalism and Prescriptivity, *Social Philosophy and Policy*, 7 (1), pp. 151-174.